

# 江戸における岡場所の変遷

平田 秀勝

## 目次

はじめに

一、岡場所の成立と取締り

二、隆盛と廃絶

三、寛政改革における岡場所統制

四、岡場所の意味

おわりに

## はじめに

近年、江戸東京学の提唱をはじめとして、さまざまな視点から近世都市江戸に関する研究が進められてい

る。

しかし、岡場所に関する研究は、あまり多くない。岡場所は公娼吉原に対して非公認の遊郭として成立したものであるが、庶民に支持され、文化にも多大な影響を与えている。そして、規制を受けながらも、江戸の遊び場として発展し、長年にわたり存続した。だが、非公認であるが故に、時の政治によって盛衰をくりかえすこととなる。

本稿では、江戸における岡場所の起立から廃絶までの歴史的な変遷と取締り政策についてとらえ、特に寛政改革による岡場所統制の結果と意味を中心に考えてみたい。さらに、岡場所の持つ遊興空間としての意味

についても見ていきたいと思う。

## 一、岡場所の成立と取締り

岡場所とは、唯一の幕府公認の遊郭である吉原に対して、それ以外の、つまりは非公認の遊郭の総称である。

吉原は元和三年（一六一七）三月に、庄司甚右衛門が傾城町創設の許可を得て、日本橋の葺屋町に二町四方の場所を給り、翌元和四年十一月に開業したことに始まる。幕府公認の遊郭ができたことにより、江戸市中において私娼を置くことは御法度となったが、実際には、品川・千住・板橋といった江戸近郊の宿場には準公認の飯盛女（めしも飯売女、食売とも書く）が置かれていたし、江戸市中にも、依然として私娼が存在していた。これらの私娼が岡場所のルーツであり、その代表的なものが湯女であろう<sup>(1)</sup>。

湯女とは、風呂屋抱えの遊女のことである。湯女風呂が繁昌したのは寛永年間からで、吉原の総名主を務めていた庄司家の家譜である「青楼年暦考」<sup>(2)</sup>の寛永

十六年（一六三九）の項には、風呂屋の繁昌をうらやみ、ひそかに風呂屋へ、遊女を出候させていた吉原者十一人が、処罰されたという記述があり、この当時、湯女風呂が栄えていたことがうかがわれる。

湯女は私娼でありながら、多少の禁制を加えられただけで営業停止を命ぜられることもなく、基本的には黙認されていた。しかし、明暦二年（一六五六）十月に、町奉行から吉原の所替が申し渡され、日本橋葺屋町から浅草の日本堤へ移転が決まった。その際、江戸市中に散在する二百軒余りの風呂屋を悉く取払うことが、移転のための交換条件として提示されている<sup>(3)</sup>。翌年正月の明暦の大火により、吉原は焼失したが、八月には日本堤にて営業を再開した。湯女風呂の取払いは、江戸市中から遠くなる吉原を私娼の横行から保護するための処置であるが、この湯女の禁止によって、江戸市中には公然とした私娼は見られなくなった。これを契機に、江戸において岡場所が成立することとなる。

江戸に岡場所の原形とも言うべきものが成立したのは、明暦の大火以降のことである。岡場所は非公認の

遊里であるため、正確な起源は不明であるが、石塚豊芥子の「岡場遊廓考」<sup>(4)</sup>によると、岡場所の起源を茶屋に求めることができる。「青楼年曆考」においても、万治・寛文年間に、明暦の頃に取払いとなった風呂屋が「茶たて女」と称する遊女を茶屋に大勢抱え置いたため、新吉原は「殊之外衰微」したという記述が見られる<sup>(5)</sup>。深川の門前仲町に、茶見世が出来たのもこの時期であり<sup>(6)</sup>、他にも鉄砲洲築地が形成されていた<sup>(7)</sup>。また、後のことであるが、護国寺門前音羽町や根津権現、谷中感応寺など、多くの江戸近郊の寺社門前地を中心に、茶屋町が建てられるようになり、さまざまな規制を受けながらも、岡場所として発展していくのである。

岡場所は非公認の遊郭であるために、取締りの対象となる。岡場所の取締り政策のことを「けいどう（怪動・警動）」という。「けいどう」とは、新吉原の者が江戸市中に私娼を発見した場合、両町奉行所へ訴え、取締りを依頼するものであり、寛文五年（一六六五）に出された町触に確認することができる<sup>(8)</sup>。

一 前々よりはいた女御法度之旨、数度相触候得共、町中はいた女隠置候もの有之由ニ候、就夫、自今以後ハ新吉原町之者共、<sup>(下書)</sup>町中ニ<sup>(二)</sup>はいた女見出次第、其家主<sup>并</sup>其町々名主方<sup>正</sup>相断置、其上両御番所<sup>正</sup>御訴訟可申上旨、新吉原町之者共ニ被仰付候間、若町中ニ<sup>(二)</sup>紛し、間敷女、新吉原之者共見出、家主名主方<sup>正</sup>相断候共、ねたり者ニ取なし口論仕間敷候、被相断候者共ハ御番所<sup>正</sup>罷出申分<sup>(下書)</sup>ケ可仕候、此旨違背不仕候様、町中家持は不及申、借屋店かり地かり等迄急度相守可申事

しかし、この町触が出される以前より私娼は江戸市中に存在し、取締りは行われていた。そこで、寛文五年以前の私娼統制について見てみたい。

元吉原時代の、代表的な私娼といえは湯女であるが、湯女に対する統制は寛大なもので、事実上の容認と言えるだろう。

江戸における湯女風呂の起立は、天正一九年（一五九一）の夏頃から言われているが<sup>(9)</sup>、本格的に繁昌し始めるのは、寛永年間からである。寛永十四年（一

六三七)の三月に「湯女制限令」が出され、風呂屋一軒につき湯女は三人までと決められた。そして、同年十二月には、湯女制限令の違反者が吉原の者により訴えられ、早速処罰を受け、吉原大門の内で磔に処せられている<sup>(10)</sup>。

寛政十四年の湯女制限令は、違反者に対する処罰は磔と厳しいが、一方で三人までならば湯女を置くことを許可している。また、吉原の者が違反者を摘発し訴え出るというのは、後のけいどうと同様である。私娼の摘発を吉原の者に負わせるという形式は、この当時から行われており、ここにけいどうの起源を見ることが出来る。

慶安五年(一六五二)六月に出された湯女に関する町触の第一項にも、寛永十四年の湯女制限令と同様に風呂屋に対して、三人以上の湯女を置くことを禁止しているが<sup>(11)</sup>、いずれにせよこれらの法令は、制限付きではあるものの私娼の容認と言うことができる。江戸期を通して数多の私娼が存在したが、湯女は唯一容認された極めて稀なケースであろう。しかし、前述の通り、明暦三年(一六五七)、吉原の浅草日本堤移転に

ともない、江戸市中に二百軒余り存在した湯女風呂は、すべて取払われてしまった。そこで湯女風呂に替り登場するのが茶屋である。

茶屋に関する禁令が最初に出されたのは、寛文四年(一六六四)のことである。その際、表棚に茶屋を構え女を置いて商売することを禁じている<sup>(12)</sup>。しかし、この町触が出される前年の寛文三年(一六六三)、鉄砲洲三崎築地の茶屋が、新吉原による大規模な摘発を受けており、その様子は「青楼年曆考」に詳しく記されている<sup>(13)</sup>。それによると、江戸市中に「茶たて女」と称する「茶屋遊女」が現れたことにより、新吉原は「殊之外衰微」したため、江戸町二丁目名主源右衛門が代表となり、町奉行へ訴えたという。そして、寛文三年十一月二十六日夜、新吉原から町人十八人が、船で鉄砲洲三崎築地茶屋町へ乗り込み、密売春の証拠として主人善右衛門、遊女小太夫とその他三名が捕らえられている。この摘発は、鉄砲洲に対して厳しい処置を取ることににより、他所の茶屋への牽制の意味を持つ一種のみせしめと思われるが、茶屋は発展を続け、けいどうの町触以降も変わることはなかった。

延宝六年（一六七八）四月、江戸市中の茶屋と煮売屋の数を書き上げさせ、同年八月に茶屋の数は従来通りで良いが、給仕の女は二人までと限り、その他にはたとえ妻子であつても置くことを禁止している。また、茶屋女の衣類は木綿のみと定められた<sup>(14)</sup>。重ねて十一月にも、八月の茶屋制限令が再令され、違反者の逮捕を新吉原に命じている<sup>(15)</sup>。しかし、天和二年（一六八二）になると、これまで二人のみ許可されていた茶屋女が一切禁止された<sup>(16)</sup>。

茶屋に対する禁令は、幕府が茶屋を密売春の場として認識していたことの表れであろう。茶屋は江戸近郊の寺社門前地などに多く、岡場所の起源といえる存在である。

寛文五年（一六六五）、けいどうに関する町触が出された。けいどうについての記録には「御町中御法度御穿鑿遊女諸事出入書留<sup>(17)</sup>」という資料がある。（以下「書留」と略す）これは寛文八年（一六六八）から享保五年（一七二〇）までの、吉原による私娼訴訟の記録であり、「岡場遊廓考」において「書上」と称された記録のことである。

「書留」によると、寛文八年（一六六八）に築地、新寺町、白山、浅草観音寺中智楽院門前、延宝年間（一六七三—一七八一）には本所、芝などの私娼が摘発されている。これ以降も麻布市兵衛町、深川八幡前、下谷、赤坂などが摘発を受けており、この時期、江戸の各地に岡場所が成立し始めていたことがうかがわれる。元禄十五年（一七〇二）、宝永二年（一七〇三）の新吉原からの訴状によれば、江戸の端々において「おどり子綿摘又は目見奉公人」などと名付けられた私娼や茶屋遊女のために、新吉原は「渴命」に及び迷惑しているという<sup>(18)</sup>。また、それまで個別的に摘発されてきた岡場所が、全体的に把握されるようになったのも、この時期からである。元禄十五年には十八ヶ所、宝永二年には三十五ヶ所の岡場所が書き上げられており、地域的に見ると、四宿をはじめ雑司ヶ谷、四谷、青山、浅草、鉄砲洲築地、本所、深川、谷中などの江戸周辺部から日本橋、京橋、神田という中心部の町屋に広く分布している。

幕府は宝永三年（一七〇六）に、女踊子師匠の禁止や比丘尼宿の営業停止などを含む町触を出したり、享

保三年（一七一八）には、岡場所として繁栄した内藤新宿を廃駅にしたが、大きな効果はなく、享保五年（一七二〇）の訴状では、寺社方支配地六ヶ所、代官所支配地は四宿を含めた六ヶ所、町方支配地は根津、深川、音羽などの江戸周辺から日本橋、京橋、神田といった中心部まで広範囲にわたり三十一ヶ所、合計四十三ヶ所もの岡場所が書き上げられている。これは、十七世紀後期から十八世紀前半にかけての岡場所発展の過程と共に、幕府の公娼制度や取締り政策の限界を示すものと言えるであろう。

## 二、隆盛と廃絶

岡場所は非公認であるため、成立当初から何度となく取締りを受けている。しかし、私娼の需要があるかぎり、岡場所は発展し隆盛をむかえることとなる。

最初に岡場所の隆盛が確認できるのは、元禄から正徳年間のことであろう。以前より江戸市中には茶屋が繁昌していたし、けいどうの数も多いが、岡場所が全体的に把握されたのは、この時期からである。だが、

この隆盛の影には、幕府による目こぼしが存在するように思われる。そこで例として、音羽の起立について見てみたい。

音羽町は雑司ヶ谷の護国寺門前の茶屋町で、江戸を代表する岡場所の一つである。起立については「月堂見聞集卷一」<sup>(19)</sup>に見ることができる。

護国寺御普請在<sup>レ</sup>之、此ハ前方桂昌院様御取立被<sup>レ</sup>遊、殊外景地能く結構に建候へ共、邊土にて繁昌不<sup>レ</sup>仕故、観音堂大きに建替り候、大方浅草観音堂程に建申候由、繁昌仕候様に被<sup>レ</sup>遊度に付、八町四方、町家建、南側に茶屋出来、女一兩人つゝ御赦免、

茶屋に給仕の女を置くことが禁止となったのは、元和二年（一六八三）のことである。しかし、この記述によると、音羽町は元禄十年（一六九七）にもかかわらず、茶屋に女を置くことを許可されている。正徳二年（一七一二）十月の新吉原からの訴状には、茶屋遊女が江戸市中に発生した根元は、護国寺門前に茶屋町が出来たためであるとし、しかも、護国寺門前は「茶

屋遊女御免之場所」のように世間には風聞しているという<sup>(20)</sup>。

「紫の一本<sup>いっぽん</sup>」には、「永代島八幡の社あり、此地江戸を離れて宮居遠ければ参詣まれにして、島の内繁昌すべからずとて、御慈悲を以て八幡社より手前三丁の間は、表店茶屋にて数多の女を置いて参詣の輩なくさみとす<sup>(21)</sup>」という記述が見られ、音羽町の他に、明暦の大火後に開発が進められた深川などでも同様のことが行なわれていたことがわかる。元禄十二年（二六九九）の内藤新宿の開発も、表面上は甲州街道の初駅高井戸が、日本橋から遠く四里以上もあり、荷物運送が困難であるためとしているが、実際は、岡場所としての繁栄が期待されたという<sup>(22)</sup>。

元禄から正徳年間における茶屋遊女の隆盛は、明暦の大火以後の幕府による江戸の市街拡張政策と関係しているのではないだろうか。明暦の大火後の万治三年（二六六〇）に設置された本所奉行により、新たに開発が進められた本所・深川や音羽町などの、江戸周辺部に存在する寺社門前地の茶屋を目こぼしすることで、新しく開発された地域に、人々を吸収させる繁栄

政策の一つとも考えられる。

享保十六年（一七三二）、町奉行は護国寺門前音羽町、根津権現門前、新氷川門前、深川洲崎辺、同所八幡町、本所横掘鐘撞堂辺の六ヶ所を新たに「売女御免之場所」と定めて、新吉原と供に隠売女の摘発にあたらせてはどうかと老中へ提案したが、結局、元の通りで良いということになった<sup>(23)</sup>。これは、町奉行が岡場所の隆盛に対して、従来の取締り政策では、限界があることを認めていた証拠であろう。

岡場所の最盛期は、宝暦から天明年間（一七五一—一七八）のことである。また、新たな岡場所が成立した時期でもある。上野山下のケコロ場所や三股中洲、菟藟島などがその代表的な場所であろう。江戸近郊の宿場の飯盛女に関する法令が改められたのも、この頃のこととて、明和元年（一七六四）、宿場の旅籠が衰退し、旅人が減少したことを理由に、飯盛女の数を一軒につき二人という制限を廃止し、品川宿には五百人、板橋・千住宿には百五十人の飯盛女を置くことを許可している<sup>(24)</sup>。さらに、明和九年（一七七二）四月には、享保三年（一七一八）に岡場所として繁栄したために廃



図 1





駅となった内藤新宿が再興され、板橋・千住宿と同様に、飯盛女百五十人が許されている<sup>(25)</sup>。これをもって準公認の四宿が、再び繁栄することとなる。

このような風潮は、田沼時代の影響であるといえるであろう。田沼意次が十代將軍家治の側用人となったのが、明和四年（一七六七）で、老中格になるのが、二年後の明和六年のことである。田沼政権の緩和政策により江戸の岡場所は最盛期をむかえ、その数は八十ヶ所を超えていたという<sup>(26)</sup>。しかし、天明六年（一七八六）に田沼意次が失脚した後、松平定信に政権が移ると、幕府の政策が変わり、岡場所はこれまで以上に厳しい統制を加えられることになる。

松平定信が老中となったのは、天明七年（一七八七）六月のことである。寛政改革によって取払われた岡場所は五十ヶ所以上であるという<sup>(27)</sup>。このため、江戸の岡場所は大打撃を受けたが、松平定信の失脚後、文化文政年間（一八〇四―二九）に再び繁栄をむかえた。いわゆる化政文化の時代である。しかし、繁栄したとはいっても、深川・本所・音羽・根津・三田などの江戸周辺部のみで、寛政改革で取払われた場所や中心部

の町家に存在していた岡場所が、再興するほどの力ではなかった。

天保五年（一八三四）に大老となった水野忠邦は、徹底的な岡場所廃絶政策を行い、天保十三年（一八四二）八月までに江戸市中にあるすべての岡場所の取払いを決め、岡場所廃絶後も遊女商売を続けたい者は、新吉原へ移転せよと命じている<sup>(28)</sup>。水野忠邦失脚後の弘化二年（一八四五）には、深川に「すわり夜鷹」と称する私娼が現れ、両国や木挽町の辺にも夜鷹が出はじめたという<sup>(29)</sup>。また、根津は、早々と再開したが、大方は復興することはできず、江戸の岡場所は事実上、天保改革により壊滅してしまっただけであるという。

### 三、寛政改革における岡場所統制

岡場所に対する統制が、特に強化されたのは前述の通り、寛政改革と天保改革においてである。天保改革では、すべての岡場所が取払われた。それに対し、寛政改革の場合、多くの岡場所が取払われたのであるが、完全に廃絶されることなく三十ヶ所ほどの岡場所が存

続している。従来の寛政改革についての研究では、岡場所について、ふれているものが少ない。そこで、寛政改革における岡場所統制とそのもたらした結果や意味について考えてみたい。

寛政改革は、天明七年（一七八七）に老中に就任した松平定信により進められた江戸期の代表的な幕政改革の一つである。岡場所の取締り強化も、その一環として行われた。それ以前は、田沼時代の緩和政策による影響もあり、宝暦から天明年間は、岡場所の最盛期であった。享保五年（一七一八）に廃駅となった内藤新宿が再興されたのは、明和九年（一七七二）のことであるし、三股中洲や菟藟島などが新たに開発され、岡場所として繁昌したのもこの時期である。まず、この当時の私娼統制について見てみることにする。

この時期は、緩和政策がとられていたため、岡場所の取締りも非常に緩やかであったようだ。本来、岡場所が摘発された場合、遊女商売を行っていた者はもちろん、家主・五人組まで罪科を問われ、建家地面は取上げとなるのであるが、大根畑の名で知られていた岡場所である本郷新町家は、明和九年（一七七二）と安

永七年（一七七八）に隠売女を置いていたことが露顕した際、「上野御本坊納戸入之場所」であることを理由に、いずれの時も、遊女商売を行っていた町人のみ処罰を受け、建家地面は取上げないという裁決が下されている。これは、明和元年（一七六四）に摘発された下谷長者町・下谷式町目に対して下された裁決を先例としているという<sup>(30)</sup>。

明和七年（一七七〇）、浅草万福寺門前町屋上納地において、隠売女が置かれていた時には、当所は上納地であるという理由により、請負人の交代のみで、地主がお咎なしという結果となっている<sup>(31)</sup>。このような処置は、岡場所の統制を緩和することにより、上納地などによる経済的效果を利用しようという幕府の意図の表れではないだろうか。

岡場所が隆盛をむかえる一方で、不良旗本・不良御家人の処罰が急増するの<sup>(32)</sup>も、この時代の特色である。「俊明院殿御実紀」には、その様子が記されているが、酒を飲み乱暴をはたらく者、娼家にいりびたり、負債をかかえながらも博奕にふける者、あるいは、病と称して出仕せず、家に遊女を隠し置く者などが多数

処罰されている。これは緩和政策の影響が町人のみならず、旗本・御家人という武士階級にまで拡大していることを示している。このような状況が背景となり、寛政改革における岡場所統制強化につながっていったのであろう。

寛政改革では従来とは異なり、徹底した岡場所の取締り強化が行なわれた。石橋真国の「かくれざと」には、寛政改革のために取払われた岡場所として、五十六ヶ所を上げている<sup>(33)</sup>。

前述した本郷新町家は、天明五年（一七八五）にも摘発を受けており、この時も前回同様「上野御本坊納戸入之場所」であるため、地面は取上げず、遊女商売を行っていた町人の処罰のみが行なわれた。しかし、松平定信の老中就任後の天明八年（一七八八）になると、一転して土地建家とも取上げと決められた<sup>(34)</sup>。その理由は、上野寛永寺領は、建家地面を取上げないのに隠売女を置くことを止めず、取締りが緩やかであるため、隠売女を置く不埒者が以前より多くなっているからであるという。

宝永二年（一七〇五）に新吉原より書上げられて以

来、長年岡場所として栄えてきた芝神明も、寛政元年（一七八九）と寛政五年（一七九三）の二度にわたる摘発により、地面取上げ、家作取払いとなり内門前は収公されている<sup>(35)</sup>。以前は、遊女商売を行っていた者は家財取上げ江戸所払い、地面は五ヶ年取上げの後、返却であったのであるが、これで岡場所として再興はできなくなってしまった。

市谷教蔵院前愛敬稲荷の場合は、芝神明とは形式は異なるが、天明六年（一七八六）に隠売女を置いていたとして取上げとなった地面が、寛政三年（一七九二）に返却になる際、教蔵院から建家を取払いたいと申し出てきたため、これを許可している<sup>(36)</sup>。同様に、岡場所として知られていた市谷八幡も、天明七年（一七八七）から五ヶ年上納地となっていたが、寛政四年（一七七二）に返却となるので、貸家建家を残らず取払いたいとの届出があり、許可されている。

この他にも、三股中洲は隅田川の水行の妨げになるという理由で、寛政二年（一七九〇）取払いとなり、深川の入船町は寛政三年（一七九二）の津波で大きな被害を受けたため、寛政六年（一七九四）に「洲先の

地其後高浪の変計りがたし<sup>(37)</sup>」として家作を取払い、高浪除けの明地とされた。確かに、深川洲先は天明二年（一七八二）の津波の際も、被害を受けている。そして、安永から天明にかけては、暴風雨により隅田川の水害が多発した時期でもある。それゆえ、これらは風水害対策として行なわれたものではあるが、三股中洲や入船町が、岡場所として繁昌していた実情も多分と考えると、その背後には、岡場所統制の意味も多分に含まれていたのであろう。「野翁物語」<sup>(38)</sup>によると、寛政になり隠売女の制禁が嚴重であるため、しばらくは江戸市中の隠売女屋は一軒残らず根だやしになったという。寛政改革による廃絶をまぬがれた岡場所は、四宿をはじめ江戸周辺部に三十ヶ所ほどになってしまった。最盛期には、八十ヶ所とも百ヶ所とも言われていたのであるから、岡場所の数はかなり減少した訳である。しかし、寛政改革以前と以後の岡場所の分布を広域的に見くらべてみると、基本的に大きな変化は見られない。

江戸における岡場所の地域や変遷を表したものが「年表1」で、寛政改革前後の岡場所の分布を地図に

したものが「図2・3」である。これからもわかるように、寛政改革により取払いとなった岡場所の多くは、本所・深川から浅草の辺に集まっている。「北里」新吉原に対して、「辰巳」と称され、一大遊郭空間を形成した深川では、土橋をはじめ多くの岡場所が取払いとなり、その結果、門前仲町を中心とした七場所と呼ばれる辺のみとなった。本所・浅草は回向院や浅草寺などの寺社門前とそれに連なる両国広小路・浅草広小路と結びついて、江戸有数の盛り場として発展した地域である。しかし、新吉原に近い浅草は、堂前を除き土腐店や智楽院門前、馬道などほとんどすべての岡場所が取払われてしまった。

この他、市谷・麻布・三田のように複数の岡場所が存在する地域の場合、市谷じく谷、麻布市兵衛町・蔵下、三田三角などの一つ、又は二つほどを残して廃絶となっている。これは統制の強化により規模は縮小しながらも、完全には廃絶されていないことの表れでもある。

芝神明、本郷新町家（大根畑）、上野山下、牛込赤城明神・行願寺など完全に取払いとなった地域もある

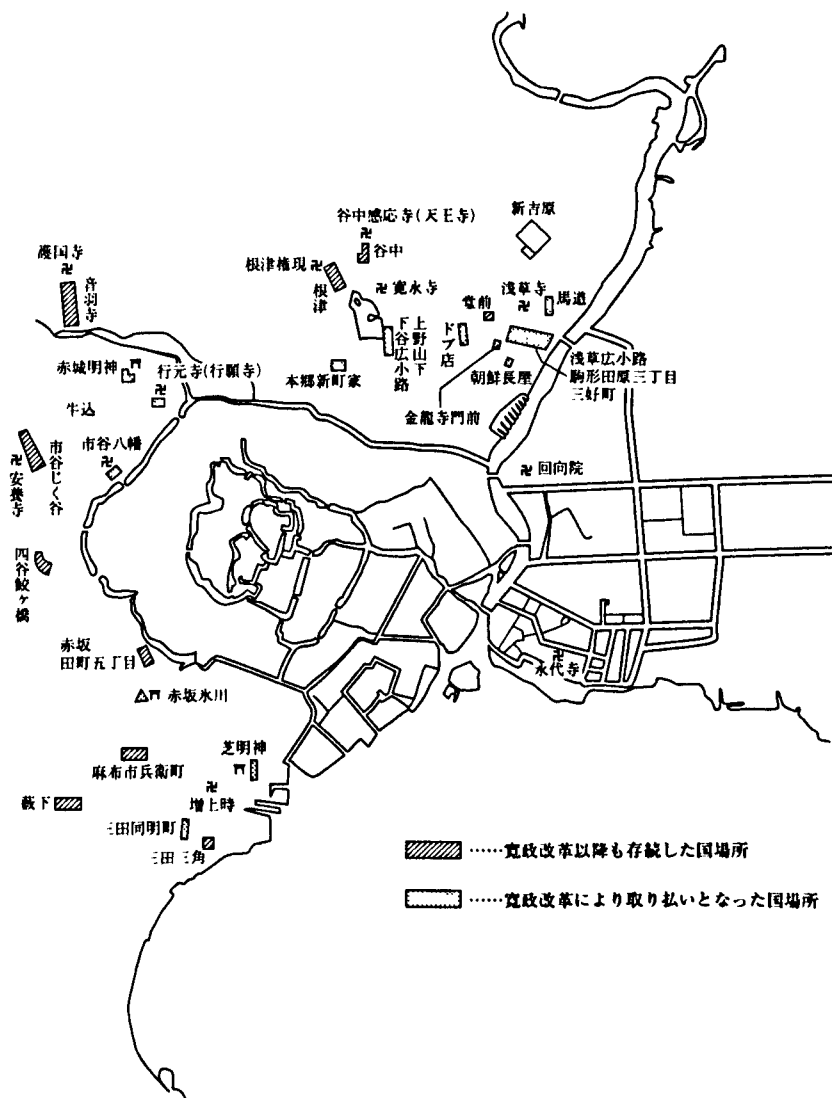


図2 江戸の岡場所の分布（本所・深川は図3参照）

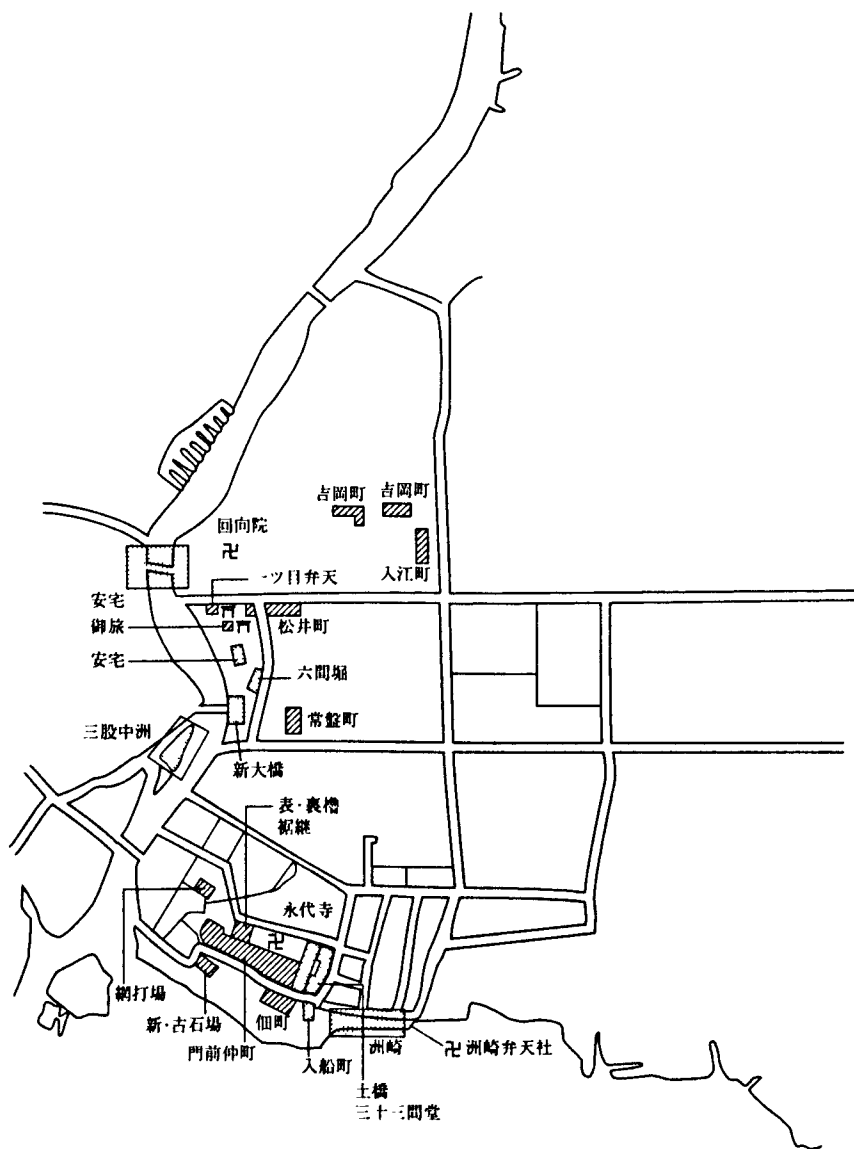


図3 本所・深川地区の岡場所の分布

が、芝神明近辺には麻布や三田、牛込の近くには市谷の岡場所が廃絶をまぬがれている。本郷・上野山下の場合、根津権現や谷中感応寺門前が近くに存続している。これ以外にも、護国寺門前音羽町、四ッ谷鯉ヶ橋などが取払われることなく存続しており、江戸の岡場所は、規模の縮小こそ見られるが、分布している地域については、大きな変化はないと言えるであろう。

このような結果は、寛政改革における岡場所統制について考える上で、重要な意味を持っていると思われる。つまり、これは単純な岡場所の廃絶ではなく、統制の強化にうながされ、江戸市中に広がり、肥大化した岡場所の統廃合が進められたことを意味するのではないだろうか。このようなことは、従来の取締り政策では見られないことであり、すべての岡場所が取払いとなった天保改革とも趣きを異にしている。

この整理統合により、江戸の岡場所は一時衰退するが、文化文政期に、再び力を取りもどし繁栄することになる。その際、宝暦から天明にかけての最盛期のように、新たな岡場所の起立や規模の拡大などはあまり見られず、寛政改革後も存続した岡場所を基本として

いる。また、天保改革により江戸の岡場所の歴史は、事実上、終りをむかえるのであるが、これらの再興と廃絶も整理統合の結果、岡場所の数や地域が限定されたことに、負う所があるのではないだろうか。

#### 四、岡場所の意味

前章までは、岡場所の歴史的な変遷や統制を中心に見てきた。岡場所は非公認であるため、江戸時代を通して常に取締りの対象となったが、度かさなる統制にもかかわらず、江戸庶民に支持され、寛文年間から天保十三年八月までのおよそ二百年もの長きにわたり存続し、親しまれてきたのである。そこで、この章では統制を受けながらも、岡場所が存続できた意味について考えてみたい。

江戸において岡場所は、周辺部の寺社門前地を中心に多く分布している。寺社門前地は岡場所が存在する空間である一方で、広小路などと同様に、盛り場として機能した場所でもある。

江戸の盛り場としては、回向院とそれに連なる両国



広小路から両国橋などを包括した両国界限や浅草、江戸橋広小路、上野山下などが知られているが、この時代においては信仰と遊興とは深く結びついており、江戸町人は寺社で行なわれる開帳や縁日、参詣などの名目で、寺社地へ物見遊山へ出かけていた。特に本所の回向院の出開帳は有名で、江戸で行われた出開帳の数は七四一件、その中で回向院にて行われたものは、延べ一六六件であり年平均一・一件、多い年には四件にもなった。また、出開帳のない年には居開帳が行われたという<sup>(39)</sup>。

開帳以外にも、寺社地では官地芝居や勧進相撲、富くじの興業などが行われている。官地芝居は、後に両国に定着するが、それ以前は、芝神明・湯島天神・市谷八幡が官地芝居の三座と呼ばれていた。勧進相撲の興業場所も深川八幡を筆頭に、本所・芝神明・谷中・下谷・神田・牛込・市谷・麹町・目白と寺社地を中心に分布している<sup>(40)</sup>。

このように、寺社地は宗教空間というだけでなく、遊興空間としての意味も持ち合わせている。そして、開帳や官地芝居、勧進相撲の興業が栄んであった所と

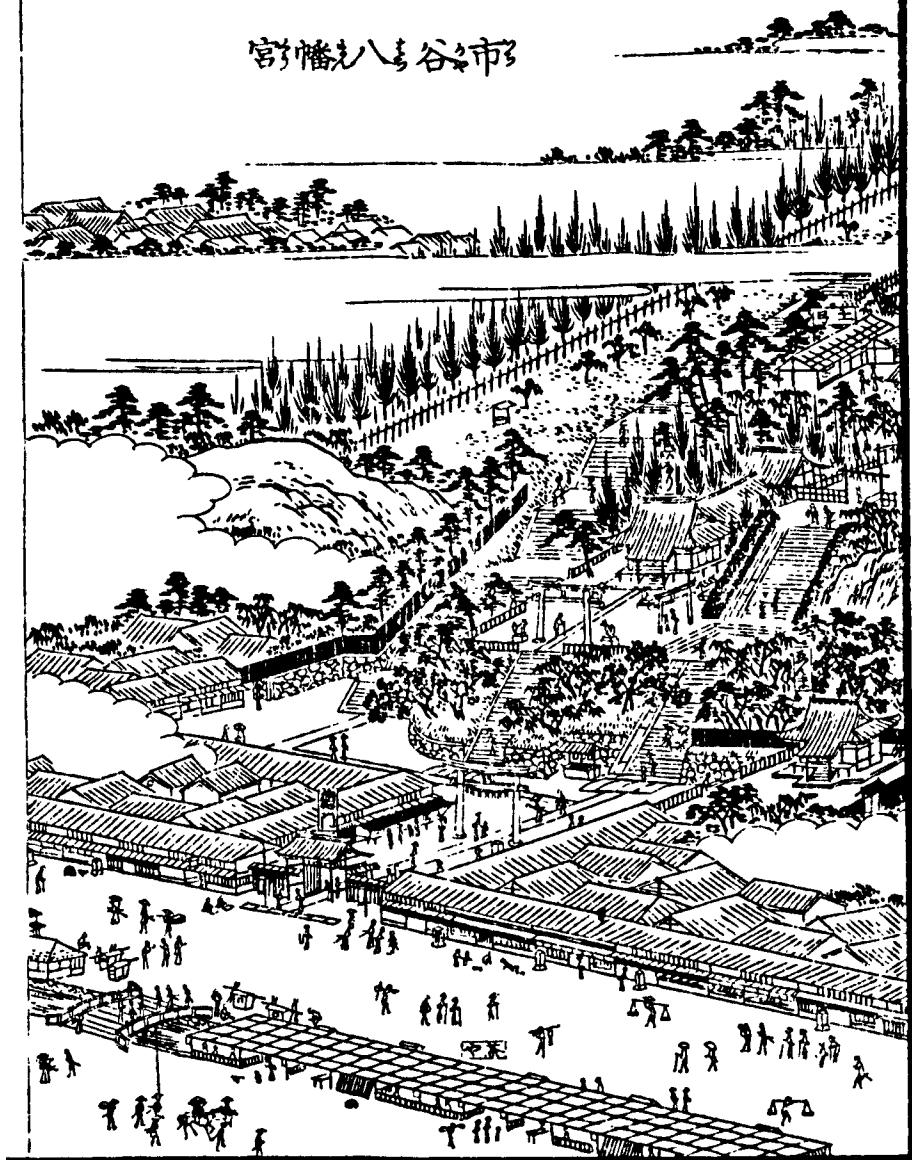
岡場所とは多く一致が見られる。寺社地の盛り場的性格を考慮に入れると、寺社門前地の水茶屋から発展した岡場所は、遊興空間の一部として機能し、盛り場を形成する要素の一つとなっていたと考えられる。

岡場所が寺社門前地に多く存在する理由として、三田村鰯魚はその著作の中で、寺社領は私娼の取締りを行う町奉行の管割外であり、統制がゆるやかであるからであると述べている<sup>(41)</sup>。しかし、これはあくまでも一つの要因にすぎないと思われる。岡場所は、新吉原にくらべて手頃で便利なため、江戸庶民に支持されてきた。前章でも見てきたように、度かさなる統制を受けながらも存続することができた背景には、岡場所の盛り場の性格と深く関係している。岡場所は、単なる密売春のための私娼窟というだけでなく、盛り場の一部を形成するものでもある。それ故に、江戸の遊興空間として、庶民のエネルギーの解放区としての意味をも持ち合わせていたと考えられるのではないだろうか。



図4 市谷八幡の光景

市谷八幡宮



## おわりに

岡場所は非公認の遊郭であるが故に、その時の政權により盛衰をくり返した風俗である。

吉原の浅草日本堤移転にともない、すべて取払われた湯女風呂に替り、江戸周辺部の寺社門前地の茶屋から発展した岡場所は、宝暦から天明年間にかけて最盛期をむかえたが、寛政改革における統制強化により、整理統合が進められた。天保改革によって完全に廃絶されるまで、長年にわたり江戸庶民に支持され、文学作品など江戸文化の形成にも多大な影響を与えた。また、岡場所は私娼窟というだけではなく、寺社門前地や広小路に展開した盛り場を形成する要因の一つという意味も持っている。

本稿では、江戸における岡場所の変遷や意味について考えてきたが、この他にも、陰間茶屋の問題や川柳から見る岡場所の実情と庶民との関係の考察など、様々な課題が残されている。近世都市江戸について分析検討する際、岡場所の研究は今後も重要な問題であ

ると思われる。

### 〈註〉

(1) 湯女は、「湯女制限令」により容認されてはいるが、公娼吉原とは異なり、岡場所と同様に私娼である。そのため、江戸の私娼の起源と言えるであろう。

一〇八(三) 頁には、「石塚豊芥子の「岡場所廓考」によると、岡場所の起源を茶屋に求めることができる」とあるが、茶屋は非公認であり、地域性からも岡場所の直接的な起源と考えられる。

(2) 「青楼年曆考」(三田村蒨魚校訂『未刊隨筆百種』第四、臨川書店、一九三七年、一九六九年複制版)。

(3) 「享保撰要類集」(『東京市史稿』産業篇第五、二三〇頁—二三五頁、東京都、一九五六年)。

(4) 石塚豊芥子「岡場遊廓考」(『未刊隨筆百種』第一)。

(5) 前掲註(2)書、三六—三八頁。

(6) 前掲註(4)書、二五—二七頁。

(7) 前掲註(2)書、三六—三七頁。

(8) 『江戸町触集成』一卷、一七五頁、塙書房、一九九四年。

(9) 「そぞろ物語」(『東京市史稿』産業篇第四、三三八頁、

東京都、一九五四年)。

(10) 「武江年表」・「寛永日記増補」(右同書、三三七頁)。

(11) 前掲註(8)書、二七頁。

(12) 右同書、一四七頁。

(13) 前掲註(2)書、三六一三七頁。

(14) 「嚴有院殿御実紀」(『東京市史稿』産業篇第七、二八七頁、東京都、一九六〇年)。

(15) 「撰要永久録」(右同書、二九〇―二九一頁)。

(16) 「常憲院殿御実紀」・「正宝実録」・「御当代記」(右同書、五九四頁)。

(17) 「御町中御法度 御穿鑿遊女出入書留」

『未刊隨筆百種』第十五。

(18) 右同書、三六一・三八五頁。

(19) 「岡場遊廓考」(前掲註(4)書、三三九頁)。

(20) 「書留」(前掲註(17)書、四二〇頁)。

(21) 「岡場遊廓考」(前掲註(4)書、三五頁)。

(22) 吉原健一郎「岡場所と島」(『國文學解釈と教材の研究』、學燈社、一九九三年)。

(23) 石井良助「続江戸時代漫筆」井上書房、一九六一年)。

(24) 「品川宿食売増人御免一件之書留」(『東京市史稿』産業

篇第二十一、四五二―四六一頁、東京都、一九七七年)。

(25) 「淺明院殿御実紀」・「撰要永久録」・「高松家文書」・「旅館屋連判状」(『東京市史稿』産業篇第二十四、一三

―三四頁、東京都、一九八〇年)。

(26) 石橋真因編「かくれさと」上・下巻(『近世文芸叢書』第十、國書刊行會、一九一一年)。

(27) 右同書、下巻。

(28) 「幕末御触書集成」第五卷、二七二―二七三頁。(石井良助・服藤弘司編、岩波書店、一九九四年)。

(29) 三田村鳶魚「仮宅の流行唄」(『三田村鳶魚全集』第二十卷、三〇八―三〇九頁、中央公論社、一九七七年)。

(30) 「明和撰要類集」

『東京市史稿』産業篇第二十四、(四七―四九頁、東京都、一九八〇年)、第二十六(二八六―二九〇頁、一九八二年)。

(31) 右同書(『東京市史稿』産業篇第二十三、三一八―三一九頁、東京都、一九七九年)。

(32) 「淺明院殿御実紀」(『東京市史稿』産業篇第二十三(六四二・六八〇―六八一頁、東京都、一九七九年)、第二十四(八四・九〇・二七三・五〇〇頁、一九八〇年)。

第二十五（二七九—一八〇頁、四五五頁、一九八一年）、

第二十六（五八三—五八四・五九九—六〇〇頁、一九八二年）。

(33) 前掲註(26)書下巻。

(34) 「南撰要類集」〔『東京市史稿』産業篇第三十二、三二七—三四一頁、東京都、一九八八年〕。

(35) 「文政町方書上」〔『東京市史稿』市街篇第三十（六七〇—六七一頁、東京都、一九三八年）、第三十一（六九五—六九六頁、一九三八年）〕。

(36) 「除地古跡寺社帳」〔『東京市史稿』市街篇第三十一、二四二—二四三頁、東京都、一九三八年〕。

(37) 「武江年表」〔『東京市史稿』変災篇第二、五四三頁、東京都、一九一五年〕。

(38) 「野翁物語」〔『東京市史稿』市街篇第三十一、五一—五二三頁、東京都、一九三八年〕。

(39) 比留間尚「江戸の開帳」四—六頁、吉川弘文館、一九八〇年。

(40) 右同書七—八頁。

(41) 三田村蔦魚「足の向く儘」〔前掲註(29)書、第八巻、二四頁〕。

#### 〔参考文献〕

・西山松之助・他編『江戸学事典』弘文堂 一九八四年

・神崎宣武『盛り場の民俗史』岩波書店 一九九三年

・吉原健一郎「上野山下の遊興空間（上）」〔『日本常民文化紀要』第十八輯三一—四四頁 成城大學大学院文學研究科 一九九五年〕

#### 〔年表1〕

「岡場遊廊考」〔前掲註(4)書〕

「青楼年曆考」〔前掲註(2)書〕

「御町中御法度 御穿鑿遊女出入書留」〔前掲註(17)書〕

佐藤要人「江戸深川遊里志」 太平書店 一九七九年

「日本橋区史」 飯塚書房 一九八三年

「京橋区史」 右同

「牛込区史」 臨川書店 一九八五年

「四谷区史」 右同

「浅草区史」 文化資料調査会 一九六八年

「台東区叢書第三集下谷・浅草町名由来考」

東京都台東区 一九六七年

鳥居清長筆『画本物見岡』より

(佐藤要人『江戸深川遊里志』)

〔図2・3〕

「岡場遊廓考」(前掲註(4)書)

「かくれさと」(前掲註(26)書)

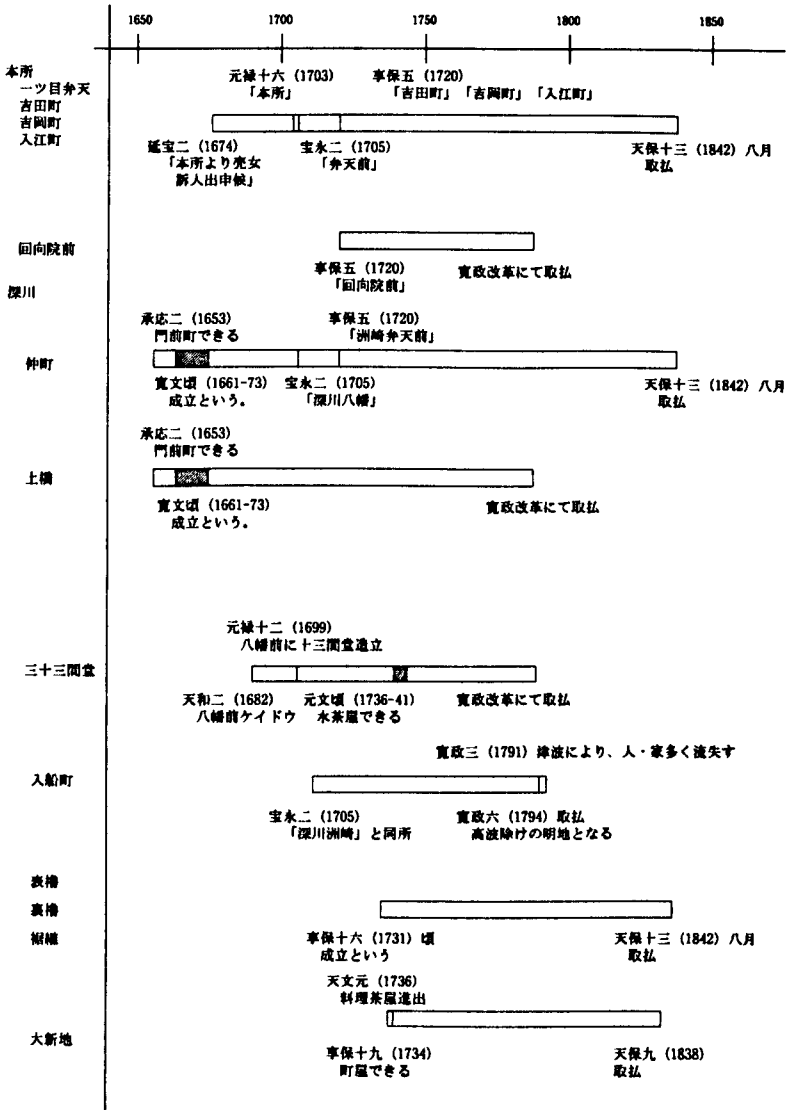
佐藤要人『江戸深川遊里志』

『復元江戸情報地図』 朝日新聞社 一九九四年

〔図4〕

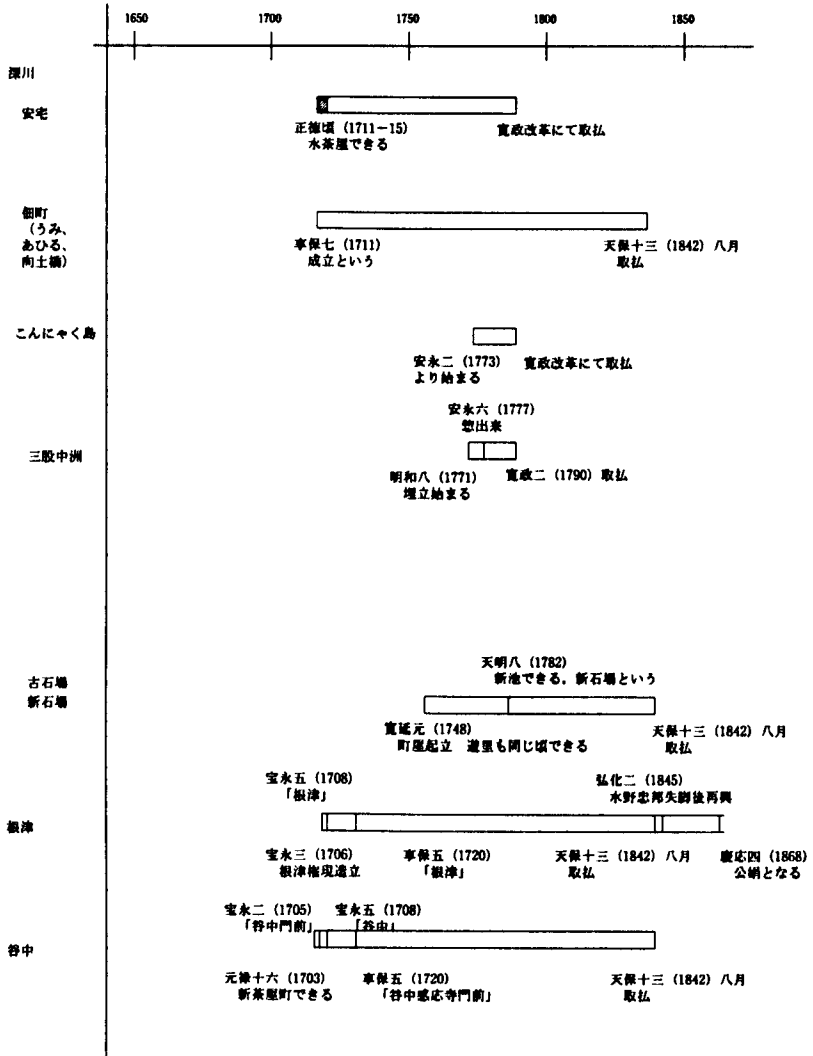
『江戸名所図会』 新典社 一九七九年

年表 1-1

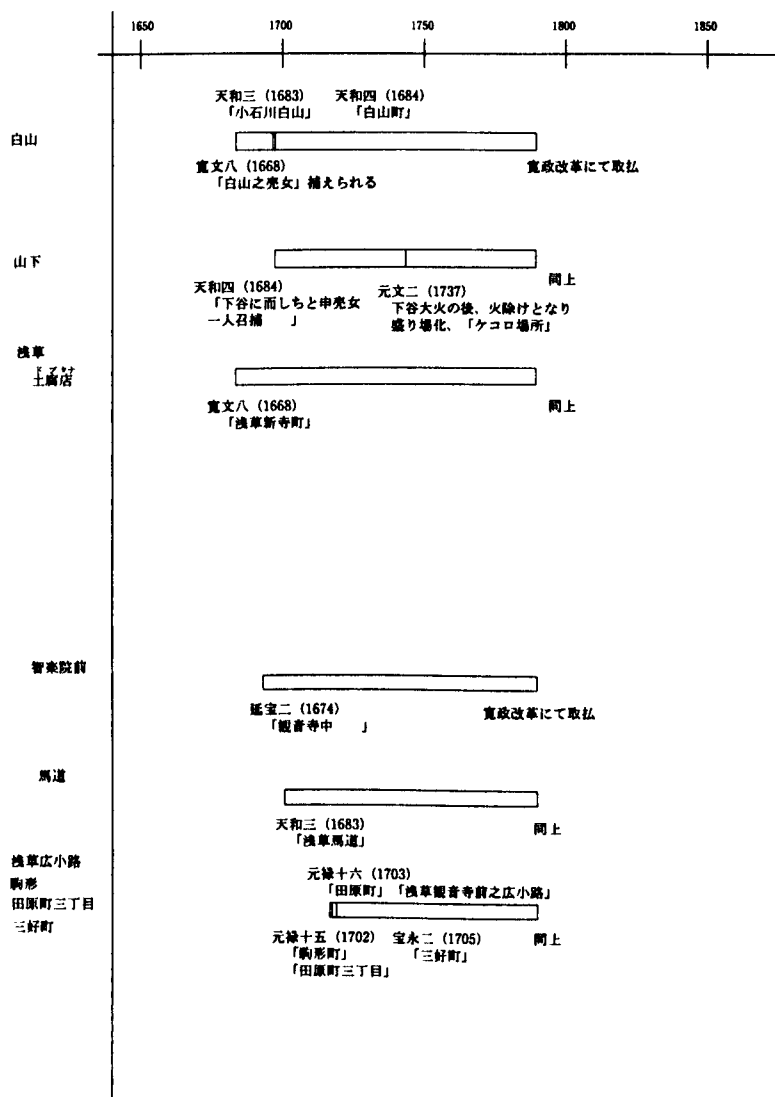




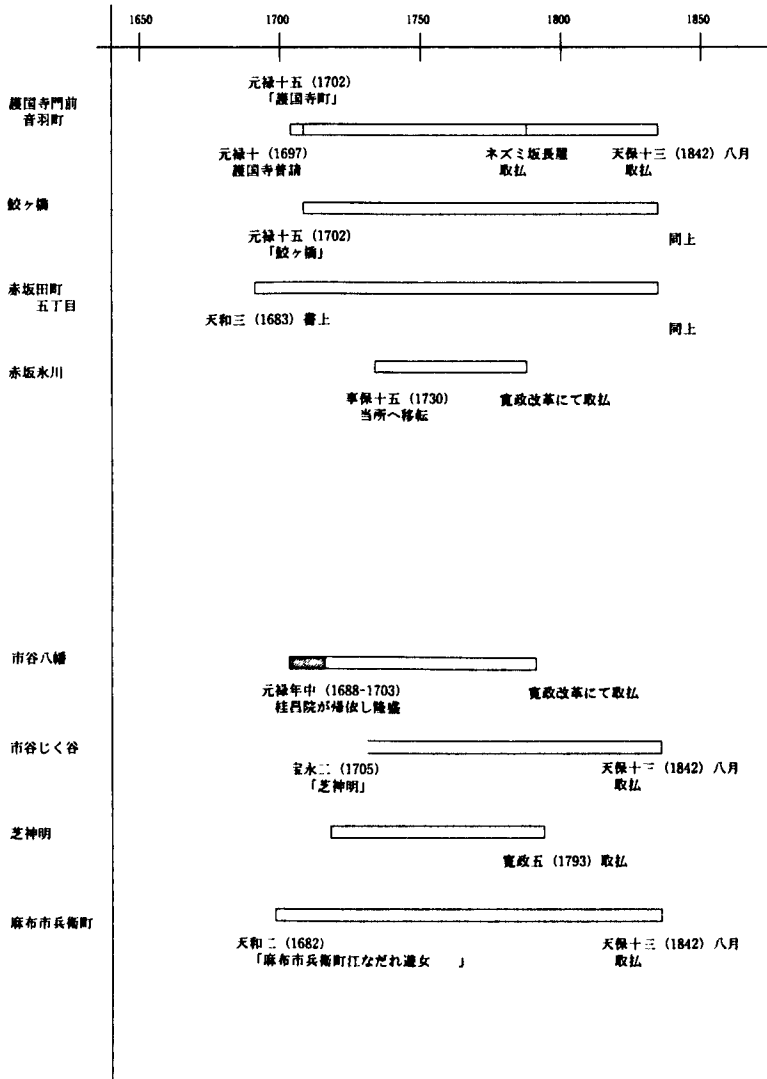
# 年表 1 - 2



年表 1-3



# 年表 1 - 4



# 年表 1 - 5

